

氏名・（国籍）	王 楠（中国）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博甲第26号
学位授与年月日	令和5年3月8日
学位授与の要件	学位規程第2条第2項該当
学位論文題目	ナーガールジュナの論理 － <i>Vigrahavyāvartanī</i> と <i>*Vaidalyaprakaraṇa</i> を中心に－
論文審査委員	主 査 教授 斉藤 明
	副 査 教授 デレアヌ フロリン
	副 査 教授 幅田 裕美

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文の研究目的は以下のとおりである。

まず求められるのは、テキストの新しい校訂本を作り出すことである。既存のVVの校訂本に関して、Rahula Sāṅkṛtyāyanaの校訂本は初めての校訂本であるが、数多くの誤りが含まれているため、学界を満足させる校訂本には至らなかった。それを訂正した Johnston and Kunstの校訂本は、写本を直接参照できなかった時代の成果であるため、今日の目から見るとテキストを修訂できるところは少くない。Yamaguchiの転写本は貴重な成果ではあるものの、校訂本ではない。また、その写本の転写にも修正されるべきところが散見される。それゆえ、今日改めて写本の写真に基づき、新たな校訂本を作成することには十分な意義があると考えられる。

また、*\*Vaidalyaprakaraṇa* に関しては、現在広く使用される Fernando Tola と Carmen Dragonetti の校訂本は、再検討されるべきところが少くない。*\*Vaidalyaprakaraṇa* (VP) のテキストは*\*Vaidalyasūtra*とVPの関係が必ずしも明瞭でなく、加えてチベット語訳のみで伝承されているため、内容理解に苦しむ箇所も少くない。それゆえ、学界におけるこれまでの研究成果を踏まえ、文脈を厳密に辿るとともに、*Nyāyasūtra* との比較考察をも行いながら、改めて批判的校訂を行うことはきわめて有意義であると考えられる。

テキスト校訂とともに目指すのはVVとVPの両論それぞれの文脈を整理し、著者問題及びテキスト問題の解明に向けた考察を行うことである。加えてまた、これらの作業を踏まえ、両論の比較考察をも行いたいと考えている。伝統的にNāgārjunaの著作と見なされるVVとVPは、同じように中観派の立場に立つ論理書であるため、両者の議論には重なる内容が多い。学界では両論を比較して研究する傾向も強い。しかしながら、従来の比較研究は主に両論の

一部の内容に焦点を当てて考察することが多かった。両論の全体的な比較考察は今なお不十分であると考えられる。

五島清隆は『龍樹『根本中頌』を読む』に Nāgārjuna の論法を二種類に分類している。その第一は枚挙法による分析である。その上で、さらに枚挙法による分析を四句分別・三句分別・二句分別・五様の分別に分ける。Nāgārjuna は以上のような枚挙法をもって、様々な話題に関してあらゆる可能性を俎上に載せる。その上でそれぞれの選択肢を帰謬法によって否定する。第二は、依存関係に依る否定である。

以上の二種類の枠組みは *Vigrahavyāvartanī* と *\*Vaidalyaprakaraṇa* を分析する際にも有効であると思われる。それゆえ、本論文ではこの枠組みを両論の分析に適用した上で、*Vigrahavyāvartanī* と *\*Vaidalyaprakaraṇa* に用いられる議論の全体像を解明することを目指した。

### 論文の構成：

第一部の研究編は本論に相当する。

第一章は *Vigrahavyāvartanī* と *\*Vaidalyaprakaraṇa* に関するこれまでの関連情報と研究史をまとめる序論である。

第二章は *Vigrahavyāvartanī* のテキスト研究である。*Vigrahavyāvartanī* の詩偈数問題、J 本において検討されるべき詩偈部分の校訂及び *vṛtti* におけるテキストの解読問題を扱う。

第三章は *Vigrahavyāvartanī* の思想研究である。*Vigrahavyāvartanī* の全体的文脈と *Vigrahavyāvartanī* において用いられる論理を検討する。

第四章は *\*Vaidalyaprakaraṇa* のテキスト研究である。VP のチベット語訳諸版本には意味が反対になる箇所を、前後の文脈を参考にし、妥当な読みを検討したい。

第五章は *\*Vaidalyaprakaraṇa* の思想研究である。*\*Vaidalyaprakaraṇa* の創作目的、全体の構成と論理を考察する。

第六章は *Vigrahavyāvartanī* と *\*Vaidalyaprakaraṇa* の比較研究である。

第二部はテキストの校訂と訳注である。

### 結論：

本論文の研究を通じて以下の諸点が明らかになった。

第二章の *Vigrahavyāvartanī* のテキスト研究において、Johnston の 70 偈説には再考の余地があり、VV の第 34 偈と第 72 偈はもともと本論の一部であったと理解するのが妥当であるという結論に至った。また、VV の詩偈のみに関して、写本に基づき、漢訳及びチベット語訳を参照しつつ、72 偈の中の総計 18 の偈について、新たな校訂テキストを提起した。

第三章の *Vigrahavyāvartanī* の思想研究において、先行研究を踏まえ、VV に適切な文脈分析図を提示した。また、*Vigrahavyāvartanī* の論理を考察することで、対論者と VV の著者の各論理の使用頻度が解った。

第四章の *\*Vaidalyaprakaraṇa* のテキスト研究において、13 箇所の諸版本に意味が反対とな

るテキストに、前後の文脈を参考にし、これらの箇所のできるだけ適切な読みを提示した。

第五章の *\*Vaidalyaprakaraṇa* の思想研究において、VP の著者が VP を著作した目的を再考した上、*\*Vaidalyaprakaraṇa* の構成と論理を示した。

第六章の *Vigrahavyavārtanī* と *\*Vaidalyaprakaraṇa* の比較研究において、前章までの研究成果を下地にして、*Vigrahavyavārtanī* と *\*Vaidalyaprakaraṇa* の異同を詳しく論じた。

## 論文審査の結果の要旨

ナーガールジュナに帰せられる *Vigrahavyavārtanī*（廻諍論、以下 VV）と *\*Vaidalyaprakaraṇa*（\*広破論、以下 VP）は、いずれも『中論』『六十頌如理論』『空七十論』とともに、ナーガールジュナ作の五つあるいは六つからなる「論理集」の一つと位置づけられる貴重な文献である。前者の VV は空に対するいくつかの観点からの批判とそれに対する応答という全体の構成をもち、唯一のサンスクリット語写本、チベット語訳、および漢訳（541 年）が伝わる。一方、後者の VP はニヤーヤ学派が伝統とする論証上の十六の項目（句義）に対する批判を内容とし、チベット語訳のみで伝承される。

本論文は、第一部「研究篇」と第二部「テキストの校訂と訳注」の二部によって構成される。第一部「研究篇」の第一章序論では、両論書のテキスト、校訂本の諸問題、および研究史を総括した上で、本論文の目的と方法を簡潔に述べる。その上で、第二章では VV のテキスト研究を行い、従来の研究者が依拠してきた Johnston and Kunst 本の偈頌数解釈を正すとともに、総計 72 偈からなる同テキストの中の 18 偈のテキストをサンスクリット語写本、チベット語訳、および漢訳をもとに批判的に考察し、訂正を行った。併せて、VV のナーガールジュナ自注内でも重要な論点となってきた 2 箇所の読みを、上述のサンスクリット語写本、チベット語訳、漢訳ならびに文脈の上から再考し、貴重な訂正を行うことに成功している。第三章は VV の思想研究と題して、同論の構成と論理を詳細に分析した。つづく第四章は従来使用されてきた VP チベット語訳本の Kajiya 校訂本および Tola and Dragonetti 校訂本のテキスト上の問題をチベット語訳（テンギル）諸版本および文脈から詳細に論じ、総計 13 箇所のテキストについて説得力のある訂正を行っている。VP の思想研究を行う第五章では、VP の創作目的、構成、および論理を詳しく分析する。その上で、最終第六章は、VV と VP を比較考察し、両書の著者問題を再考している。

第二部「テキストの校訂と訳注」では、第一章で VV の総計 72 偈のサンスクリット語校訂テキストを示すとともに、その翻訳ならびにチベット語訳校訂本と漢訳との対照を行う。第二章は注釈を含む VV 全体の再校訂本を和訳とともに提示する。第三章は総計 63 の *\*Vaidalyasūtra*（\*広破經）のチベット語訳校訂テキストを和訳とともに示す。その上で、最終第四章は VP 全体のチベット語訳校訂テキストを和訳とともに提示する。本論文の著者による VV および VP の校訂本は、今後の両論研究において信頼できる新たな校訂本として重要な意義をもつものであり、第一部の研究篇と併せ、本論文の貢献はきわめて大きいと考えられ

る。

令和5年3月1日午後2時30分から午後3時40分までの約80分にわたり、提出論文についての口述試験を厳正に実施した。主査・副査から、本論文の優れた貢献が評価されるとともに、部分的ながら、補訂が求められる箇所の指摘もなされた。

口述試験終了後、主査・副査の合議の結果、本論文は *Vigrahavyāvartanī* ならびに *\*Vaidalyaprakaraṇa* に関する最新の研究資料にもとづき、従来の研究が依拠してきた両論の校訂テキストの少なからぬ不備を正すとともに、両論の構成と思想内容についての詳細で、説得力のある考察を行っている点が高く評価された。本論文はナーガールジュナ研究史において画期的ともいえる研究成果であり、とくに両論の信頼できる校訂テキストを提示したことは当該分野への多大な寄与をなすものと認められた。本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい成果であると判断する。